



令和4年1月1日現在	
総世帯数	1,379世帯
総人口	2,477人
男	1,182人
女	1,295人

### 祖母からの贈り物

錦町町会

中澤 こそあ

昨年の春、所沢の叔父から連絡があり、「亡くなった妻の洋服を整理していたら箆笥の上から、反物が沢山出てきた。たぶんお袋が織って送ってきたものだが、どうしたらいいかわからないから、そちらに送る」とのことだった。私の祖母と母は農閑期になると機織りをしていた。その当でも機織りをしている人は少なかつたと思う。私は、学校から帰ると2人のいる機



織り部屋に行き、ストーブで煮た豆をつまみ、真似事でお手伝いをしていた。

機織り部屋で、今でいう女子会みたいにおしゃべりしていたのだらう。祖母の言葉を今も覚えている。「機織りは一本違っても物にならないが、人は一本くらい違っても大丈夫だ。」母は「機織りは織機にかけるまでが勝負。かけた後戻りはできない。だからよく考えてきちんと準備をしなくては。しかし自分の考えた通りの色にならないから面白い」と。そんな中で育ち、私も裁縫が好きで、ちょっとした洋服やバッグなどは今も作っている。

送られてきた反物は5反メートルにすると45cm×50m以上もある。しかし50年前に織られたと思えないほど

### 初詣された方へ

中条東第3町会

北川 清三

4回目の投稿になります。今回は、正月号になる為、神社について若干触れさせていただきます。ご興味

色鮮やかなオレンジ、スカイブルー、レッドの糸が格子模様や大胆なストライプ模様で織られていた。なんとこの色使いは斬新ではないか！祖母はこの反物を織り、中学卒業後東京に送り出した息子に、どんな思いで送ったのだらう。現金の代わりにせめても思ったのか、息子のお嫁さんに布団にでも仕立ててもらおうとしたのだらうか。残念ながらそのまま月日がたち巡り巡って私のところへやってきました。

今、その反物でバッグを作って、祖母を知る親戚にプレゼントしている。まず、元の所沢の叔父に送ると、えらく評判が良く、孫や嫁があつという間に持って行ったと笑った。5反もあるのだから私が元気なうちに使い切れるとは思わないが、これも使命と思つて作っているのである。

味のある方はお付き合いください。

皆さんも初詣で必ず目に入る物として、鳥居、狛犬、しめ縄があるかと思ひます。この3点の意味をある観点からご紹介いたします。その観点とは「日ユ同祖論」です。日本人と血統的ユダヤ人は同じ祖先を持つという1つの説です。同じ風習が多い事や特に言葉では4千単語以上同じ発音と意味で用いられる様です。この点から見ると前述の3点も古代イスラエル由来で説明できます。まず鳥居です。トリーは古代ヘブライ語で門です。朱色なのは、モーゼがエジプトから民を救い出す時、付いて行く人は自宅の門を羊の血で塗った所から来ているとされます。次に狛犬です。現在は左右同じ犬もありませんが、本来は違う様です。右が獅子で左が一角獣(ユニコーン)です。前者が口を開けた阿形、後者が閉じた吽形、つまり始まりと終わりに当たります。前者は南ユダ王国の象徴、後者は北イスラエル王国の象徴になります。つまり、紀元前に南北に分裂し、行方不明になった12支族は、日本に帰還し、統合された事を示唆していると考えら

れます。次にしめ縄です。紙垂と鈴が付いている場合もあります。この構成は、出はエジプト、イスラエル経由で日本到着の間に神が現れる時の演出と同じ事の様です。つまり、雲(しめ縄)から、いなづま(紙垂)が神鳴り(鈴)とともに現れる形です。

今回は一観点からの一解釈をご紹介させていただきますました。諸説色々あり何が正しいかは判りません。ただ神社は太古の昔(弊立神社は1万5千年)からの宝だと思ひます。

拙文に最後までお付き合ひいただきありがとうございます。



河辺文書による「深志神社と宮村町の歴史」

去る11月17日に第二地区歴史文化継承委員会主催による標記の歴史文化講演会が開催された。講師に松本市文書館特別専門員の小松芳郎先生をお招きし、総勢50名が参加した。

今回は宮村町庄屋を務めた河辺家に伝えられた河辺文書に基く講演となった。過去に何度か調査が行われ、貴重な史料として県下でもその存在は知られていたものの、その保存状況が極めていなかった。

平成13年に河辺家のご協力により、保管されていた蔵を開け、すべての文書の調査が行われた。貴重な史料を総て燻蒸し、目録を作成、原本に傷をつけないよう中性紙の封筒に入れ保存した。現在、松本市文書館に寄託され、保存



小松芳郎先生

とともに、閲覧や活用を可能にしているとのことであった。

その河辺文書の考察から、いくつかの史実が示された。

まず、深志神社と宮村社の縁起、江戸時代の祭礼や両社を地域住民が維持していた様子やお宮の境内の絵図など、当時を知る重要な史料となっている様子が語られた。

次に、天正10年(1582)、小笠原貞慶が旧領の深志を回復するに当り、河辺与三左衛門に、「自分はこのたび府中へ赴きたいから、前代のように勤仕を頼む」という書状を送り、協力を要請していたこと。

また、石川氏が松本城築城の際に、多くの職人が来住し、井戸が汚される中で、源智井戸のすぐ脇にあった河辺家に源智井戸の管理を依頼していたことなど、河辺家がこの地域で重要な存在であった興味深い事柄にも触れられた。

さらに、江戸時代の宮村の町並を「家主間数絵図」の貴重な実物史料を基に説明があり、町人ばかりでなく、下級武士の屋敷も存在していた宮村町の様子が確認された。

ポッチャ大会

昨年11月29日、令和3年最後となったポッチャ大会が行われた。

老若男女、参加者は21名。ご存知、ポッチャはパラリンピックにおける正式種目。

先の東京パラリンピックにおいては、日本人選手が快挙を成し遂げたことは記憶に新しいところ。

目標のボール(ジャックボール)に味方チームボールをいかに近づけるかを頭に入れ、競い合う競技であるが、相手チームもそれに必死。



微妙な駆け引きの中競い合うのは実に楽しい。

会場準備等でお骨折りをいただきました公民館職員さんありがとうございました。

この河辺家の文書を紐解くことにより松本の城下町や第二地区の実像が見えてくる貴重な史料であることが納得できた講演であった。講演を機に意見交換が出来ればさらに深まったのではと思う。

第二地区公民館 要援護者優先避難所開設訓練

去る12月12日(日)第二地区の推進組織並びに各団体の副部長、副会長を対象に要援護者への支援方法や避難所の設営訓練の実演を行いました。

主な避難所の設営では、地震などの大規模災害の際、被災者のプライバシーを守るためのパーティション(間仕切り)の設置。水道、電気などのライフラインがストップした場合に備え、発電機、飲料水を準備。さらには、コロナ対策のマスク、消毒液、救急セット等の防災備品の確認。最後に非常食のわかめご飯やビスケットを食べ、反省会を行いました。

参加した役員感想では、災害時に力を発揮するのは、日頃からの地域の繋がりが大切だということでした。



訓練の様子

すすき川

塩尻市内の高校に創立以来続いている華道部があります。3年前に初めて男子生徒が入部しました。女子に交じって彼は黙々と続けていました。この子は生け花を楽しんでるのか？表情からは窺い知ることができませんでした。

2年生になり少し様子が変わってきました。花に向き合う表情が真剣に、そして柔らかくなりました。同級生を誘って男子2名になったのも大きかったのかもしれませんが。

その彼が3年になり、最後の発表の場である文化祭には「こっとう作品を生きたい」と自らデッサンし、それを見事に生け上げました。

彼はこの春、生け花を深く学べる京都の短大に進学が決まりました。将来は華道の先生になりたいとのこと。華道男子としても活躍してみたいと話してくれました。いつの間にかこんなに生け花が好きになったのかは定かではありませんが、困難であっても自分で決めた新たな道をしっかりと歩んでほしいと思います。彼の未来が輝かしいものでありますように！ (茅野)